

由井 史子

学校名：神奈川県立ひばりが丘高等学校 担当教科：英語科

## 1. 今回のウガンダ研修における目的やねらい

研修計画にのっとり、以下の3点に重点をおいて研修をおこなった。

### (1) 発展途上国の現状を自分の目で見る。

2学期の授業では、貧困・病気・非識字・失業・ホームレス・負債の観点から、発展途上国の抱える問題を生徒に考えさせる教材を使用することになっている。後発開発国の1つに認定されているウガンダで、私自身が見聞きした問題を具体例として授業中に示すことで、日本の生徒に地球市民として自分たちにも関わる問題であることを感じさせたい。

### (2) 隊員の活動を知る。

発展途上国で活動している青年海外協力隊員から直接話を聞き、どのような取り組みをしているのか授業で紹介したい。発展途上国ではどんな援助が必要なのか、日本とどのようにつながっているのか、を具体的に知ることで、自分たちがどのように国際協力に関わるべきかを考えさせたい。

### (3) 教室内の生徒とコミュニケーションをとり、日本の生徒との違いを考える。

実際に交流授業をさせていただき、日本での授業と比較する。教育環境の違いや生徒の発言、アンケートの回答を活用し、学ぶことについて日本の生徒に考えさせられる教材を作成する。

## 2. 目的やねらいの達成度

各訪問地での青年海外協力隊員・JICA 専門家の方々のご協力のおかげで、実りある研修ができた。

- (1) 学校や病院の設備を実際に見学することができたので、必要なものが不足している状態であることが日本の生徒に伝えられると思う。HIV/AIDS やマラリアなどの感染症対策、孤児や女性など社会的弱者支援というような具体的な問題について隊員を通して話を聞くこともできた。また同時に、ウガンダの美しさや人々の心の豊かさも体感することができたので、発展途上国であるウガンダの現状として多角的に紹介したいと思う。しかし、短期間の研修では限界があり、問題の本質が理解できたとは到底思えない。実際に、今まで知りえた情報だけでは多くの疑問を感じ、自分でも整理しきれない状態である。私自身の課題として今後も研修を継続させるとともに、生徒たちにも考える材料として提供したいと思う。
- (2) 出会った隊員に、「自分なりに設定している目標はなんですか。」という質問をすることで、より具体的な活動内容を調査した。その答えから彼らの誠実な活動ぶりが浮き彫りになり、とても心が打たれた。また、任地の方々が快く私たちを迎え入れてくれるのは、隊員が現地で確かな信頼を得て、スタッフや生徒たちに喜ばれる活動をしているおかげだ、と実感した。多くの隊員・専門家のお話を聞くことができたので、国際協力について様々な方面から紹介する教材作りができると思う。
- (3) 実際に授業をやってみて感じたのは、日本の生徒との類似点が多いということだった。ビデオで授業風景を紹介すれば、日本の生徒たちも同様な感想を持つと思うので、ウガンダの学校を身近に感じる材料になると思う。ウガンダの学生に、日本の生徒と同じ5つの質問を試みたが、質問の答え方がわかりにくかったこと、生徒全員にうまく指示ができなかったこと、などが原因で、十分な回答は得られなかった。しかし、発言や回答の中に注目できる点があるので、理数科プロジェクトで岡本専門家から伺った話と併せて、ウガンダの教育を知る一端となったと思う。

### 3. ウガンダから学んだこと

#### (1) 発展途上国についての認識

緑と水が豊かな国である、と聞いていても、赤道直下という言葉からのイメージが強く、実際に訪れるまでこれほど気候に恵まれた国であるということが想像できなかった。同様に、様々な点で事前の知識と体験したことには大きなギャップがある。

また、ゆったりした時間の中で素朴に生きる、温かい心を持ったウガンダの人々との交流を通し、発展途上という枠組みは先進国の物差しで計った基準により私たちの固定観念でできているものだ、と改めて考えさせられた。

#### (2) 国際語としての英語

ウガンダでは英語が公用語であるが、発音においてだけでなく単語の使い方にも、現地語や現地の文化的背景からの影響があるようだ。例えば、現地語では1人に対してと複数に対してではあいさつの言葉も違うが、それがmy/ourの使い方にも影響を与えているのではないか、と思われる生徒の発言が授業中にあった。私たちが使用している英語は万国共通語ではない。英語の多様性を推し量れるエピソードを日本の生徒に紹介できることは、たいへん意義があることである。受験の影響で、日本では言語本来の性質である変則性・柔軟性が英語にもあることを、ともすれば忘れがちだからだ。アフリカという文化の異なる地域で使用されている英語を、間接的にはあるが紹介することができるのは、大きな収穫である。

しかし、学校訪問の際にあいさつを現地語で行なうと、明らかに歓迎の度合いが違って、いかに母語が心に響くかを実感した。今、ウガンダでは初等教育を現地語で行なう動きがあると聞いた。言語学習は考える力の育成につながる大切な問題である。23以上の部族語があるという国での学習言語と教育がどのように改革されていくのか、たいへん興味深い。

